

大森 蝶子

山寺に百日紅の色あせて夕日斜に日ぐらしの鳴

◎ 眞宮 起雲

野に立ちて歌に倦みたる手すさびよ秋の七草花
環にぬかむ

秋の夕べ無心に動く雲の影を君語らずや興清か
らむ

花に狂ひ月に悶えの興も倦みぬ沈黙の君よ我を
召しませ

戦場の斷腸

林 天然

天奪高く星滿ちて
數十餘りの天幕は

樹々はまばらに霞たち
軒をつらねて引張られ

篝火點々明滅し

こゝは何處ぞ遼東の
萬籟音なくしづめるに
こだかき丘を辿りつゝ
腕くみ合はせて座せる時

二

世にます人は多けれど
老ひたる母はたゞ獨り
エすがもすべも共白髮
國の爲めとはいひながら
うしや門出の其際に
母上暫し寂しさを
即歌の聲を聞きませと

三

世界の歴史に我國の
忍ぶ恨みは十餘年
時機は來れり敵露西亞
腕のつゝかむ其限り
敵の滅ぶるそれまでは

五十二

駒は嘶く廣野原
王師の屯す野營なり
年猶若き士官あり
歩む姿は雄々しくも
丈夫の涙誰か知る。

果敢なきものはわれのみか
寄る年波はいや増すも
便りすくなの身の上や
思へば永劫の生別れ
笑もて涙うちはらひ
耐へたまひて恙なく
いひしも今はあだなれや、

御稜威示さむ時までと
日本健兒の奮ふべき
千歳一過げにこのとき
向ふ奴原斬りまくり
生きて還らぬ覺悟なり

知るや知らずや母上は
我が凱旋を待たるらん

四

ふりさけ見れば涙々と
雲山千里でらせども
ゆくへも知らぬわれ故に
何を夢みんこの夕べ
こよひ限りの見納めと
つきも哀れと思ひけむ
着空飛ぶ雁がね二三聲

五

折しも響く喇叭の音
眠さまして呼びたてぬ
故郷の空を伏し拜み
われは死地へと赴かむ
一日の如くはぐまれし
先立つ罪は幾重にも
剣とりなほし勇ましく

指折り數へ今日明日と
されど母上ゆるされよ

月は東の中空に
故國に残りし母上は
いと暗路にふみ迷ひ
明日に迫れる激戦に
取出す寫眞みつむれば
雲に隠れて朧なり
夜既に更けて風寒し

暫しまどろむ兵士の
若き士官はこれまでと
『さらば母上いざさらば
二十餘年の春秋を
鴻恩報ゆる時もなく
ゆるさせ給へさらばとて
たち出でたるぞ健氣なる。』

老人物語

雨　峰　生　譯

これは原作韻文であつて『オーズオーズの泉』の歌なのを韻文でなく言文一致に意譯して見たのですけれど、どうも甘く出来ないので汗顔なのですが、いくらか、老人の言葉のうちの意味をくむが出来ますれば、嬉しいのであります、老人物語としたのは、對話中のマツシユー先生の方に重きを置いたのですから、其のつもりにて、讀んでください。

私たち兩人は、お互に懐しい、信の情を、うち明けまして、假令んは、マツシユーさんの方は、七十二にもならずと云ふ、お爺さんで、私の方はほんの子供とも孫とも云ふべき様な形では御座いますけれど、友達づれと云ふ鹽梅で、今そちこちと笑話なぞしつゝ、歩き廻つて居たので御座いました、臆て廣く廣く、枝や幹を擴げて被い蓋つて居る、大きな樫の樹の下の處の苔や芝で一面奇麗になつて居る、休憩するのに屈境と云ふ處に、兩人